

視覚障害体験授業の実施例*

1. 視覚障害体験授業の概要

(1) 授業のねらい

「総合的な学習の時間—やさしさってなんだろうな?—」の6年間を通してのねらいは以下の2点である。

- ①自分の周りには色々な立場や状況の人がいることを知り、自他の違いを正しく捉える（障害や老人の疑似体験や話を通して不便な状態を知る。また、困っている人を目の前にして自分は何ができるか、どうしたいかを考える）。
- ②相手を認め、やさしさについて考える（相手の立場や状況に立ちその気持ちや行動を考える。また、世の中は「助けられたり助けたり」という関係で成り立っていることを考える）。

視覚障害の理解を主題とする本授業では上記をふまえ、「視覚障害の知識や体験を通して、障害による不自由さと不自由さに対する生活上の工夫について知る」をねらいとした。

このねらいの達成には、疑似体験を十分に行うこと、体験後、児童一人ひとりが自分の考えを記録し発表すること、障害のある人の話を聞くことが必要であると考え授業計画を立案した。

(2) 手続き

本授業の実施学級はA小学校の第3学年全2学級及び第4学年全2学級、合計4学級であった。このうち本稿では、モデルケースとして、筆者ら（特殊教育研究者1名と通級指導教室担当教諭1名）が数多く関与した第4学年のB学級について論ずることとする。

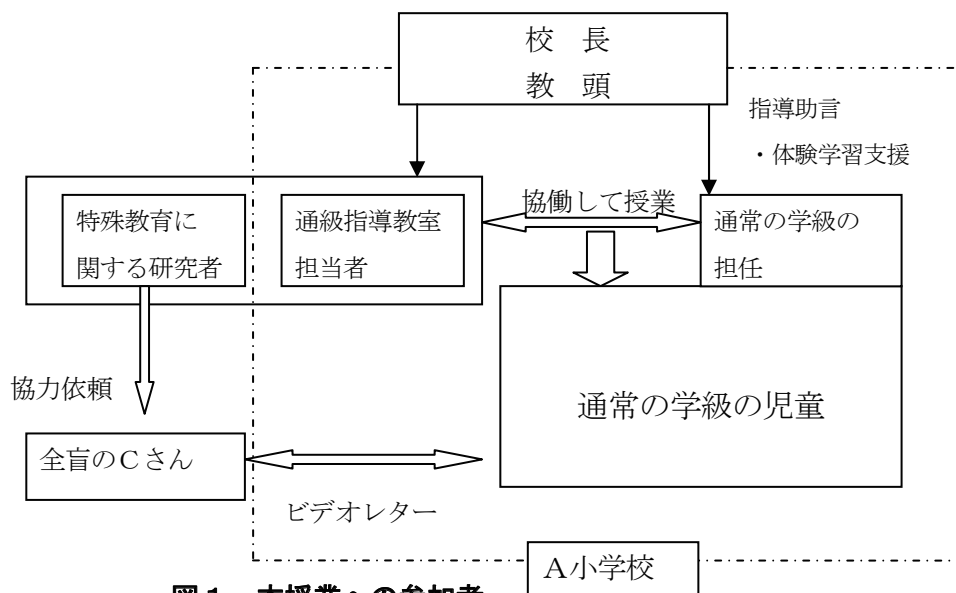


図1 本授業への参加者

*) 本授業例は平成13～14年度科学研究費補助金若手研究(B)研究成果報告書「通級指導教室と通常の学級との連携による『総合的な学習の時間』の展開」に掲載したものの一部を修正したものである。

本授業への参加者について図1に示した。主たる授業者は、通常の学級の担任教諭1名と筆者らであった。体験授業においてはグループ別学習の支援や安全確保のため、他学級担任や校長、教頭も随時参加した。

(3) 指導案作成

まず、筆者らが指導案素案を作成した。全授業者で協議したのち、通常の学級の担任は、授業のねらい、体験内容や児童への発問内容の吟味を行った。これを受け、筆者らは、先行研究等を検討し、専門的知識の収集と提供、体験内容の具体化を行った。さらに、通常の学級の担任は、体験内容と担任する学級の特性との照合及び検討を行った。この作業には約1ヵ月半を要した。

(4) 授業の構造

A小学校当該学年における「総合的な学習の時間」の年間計画のうち、本授業は15単位時間前後（学級により増減）を使用した。単位時間の内訳と授業の構造を図2に示した。

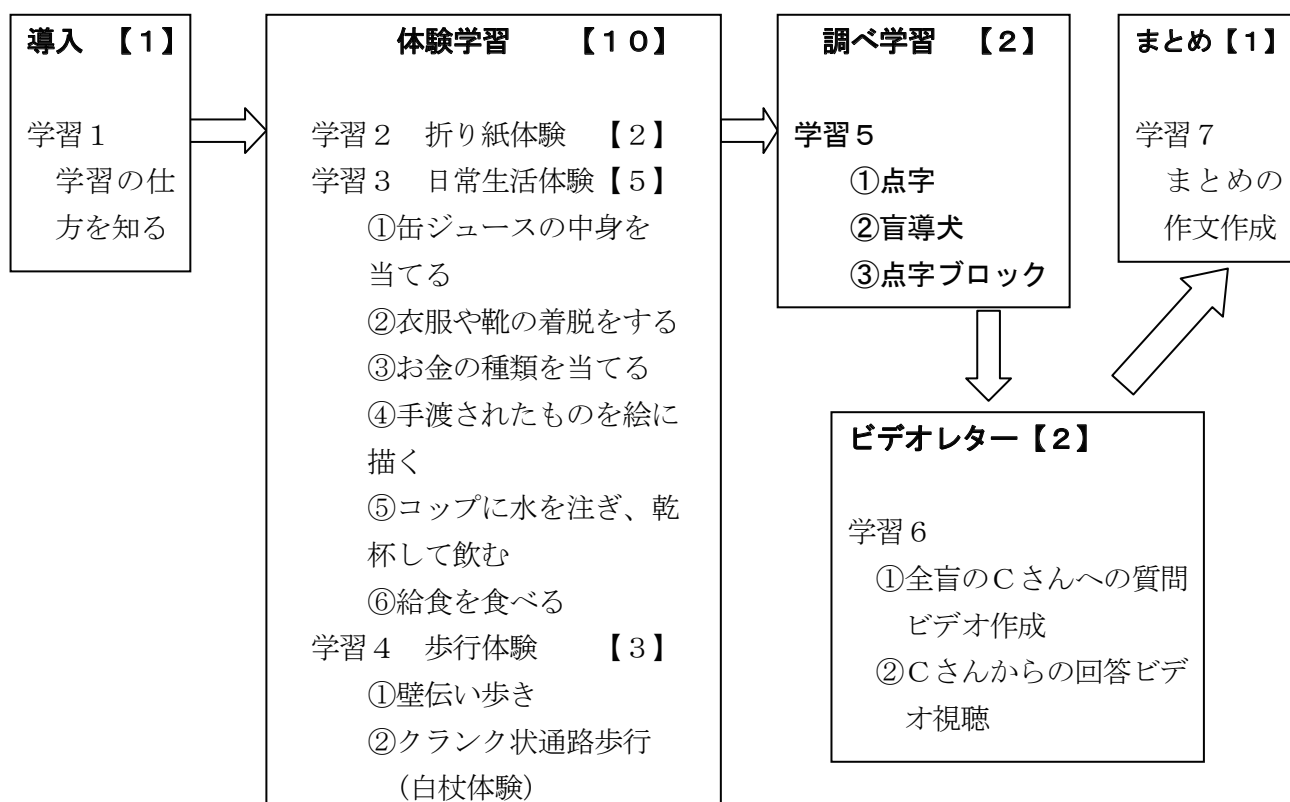


図2 本授業の構造（【 】内の数字は単位時間数）

本授業は図2に示したように体験を重視したものであるが、体験の単純な繰り返しに終始しないよう留意し、児童の学習の仕方を図3のように設定した。

それぞれの体験学習ごとに、①体験に関連する知識を学ぶ、②体験する、③体験結果について考える・まとめる、④それらを発表しあい共有する、を行った。そのことにより新たな知識や疑問を持ち（再び①にもどる）、次の体験に臨むという過程を、繰り返すように

した。こうした学習の仕方により、体験ばかりではなく、他者の説明や話を聞く、自分の考えをまとめて話す、といったコミュニケーション能力の育成も重視することにした。通級指導教室の担当者はコミュニケーションを専門としており、通常の学級に対してこの点からも貢献できると考えた。

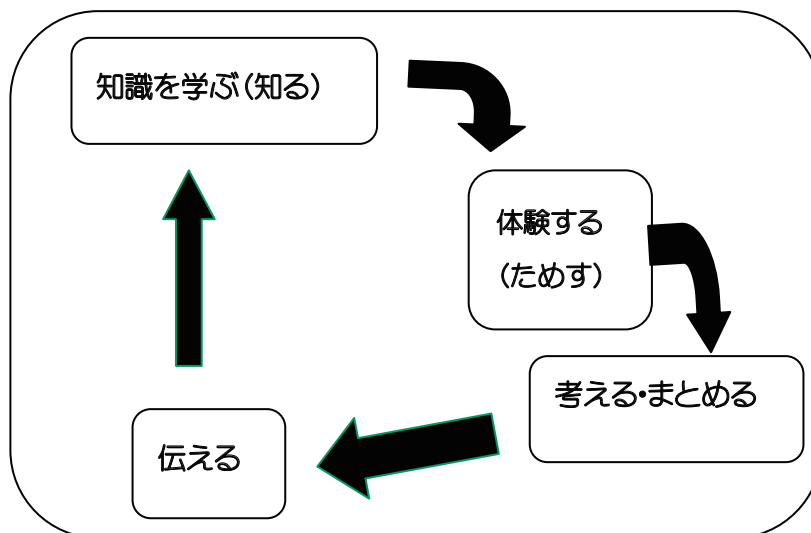


図3 学習の仕方

また、全ての体験学習についてワークシート（図4参照）を準備し、児童一人ひとりに記録させた。これらのワークシートは卒業時まで保存・蓄積（B学級の児童では、第4学年から第6学年までのワークシートを1冊のファイルに保存することになっている）し、自らの成長や学習の過程を振り返る材料とすることにした。

2. 授業の内容

(1) 学習1（導入、1単位時間）【筆者らが主担当】

児童たちに、「目の役割は何か？」「目が見えなくなったとしたらどのような生活になるだろうか？（学校では？ 家では？ 外では？）」「視覚に障害のある人の生活への工夫にはどのようなものがあるだろうか？」と問いかけ、話し合うことによって、視覚に関する興味や視覚障害に関する課題意識を高める。併せて今後の学習の仕方と実施計画について説明する。その際、安全の確保について児童たちに十分周知する。見えなくなる体験は貴重であるが同時に、普段見えている者にとって非常に危険な体験でもある。特に登下校時など屋外では絶対に目をつぶったりアイマスクをして歩行しないこと、疑似体験は一人で行わないことなどを徹底して伝える。

(2) 学習2（体験学習1：折り紙、2単位時間）【通常の学級の担任が主担当】

目が見えない状態で折り紙を折ってみる体験である。折り紙で「さいふ」をアイマスク無し・有りの順で折る。それぞれの所要時間を計測して比較する。アイマスクをした時の困難さや試みてみた工夫及び感想などをワークシートに記入する。ワークシートに記入したことを発表する。

| |
|---|
| たいけん |
| 生活体験ワークシート6 (グルメ体験) |
| 年 組 名 前 _____ |
| たっぴいめしあがれ! |
| 1. アイマスクをして食事をするとうんなことが困ると思う？ |
| |
| 2. うんなふうにて験しましたか。教えてください。 |
| |
| 3. 困ったところはうんなことでしたか。また、どうして困ったのですか。 |
| 困ったところ： どうして困った： |
| 4. こぼさないためには、うんな工夫をすれば、よいとおもいますか。 |
| |
| 5. アイマスクをして給食を食べよう。うんな様子だった？ |
| |
| 6. 家の夕食でもやってみよう。(できる人はね。様子は裏に書いてみましょう) |
| 7. もし、みんなに視覚障害があつたら、うんな工夫があれば食べやすくなると思いますか。 また、うんなことは絶対されたくないことはありますか。 |
| 工夫： 絶対されたくないこと： |
| 8. 「グルメ体験」の感想をかきましょう。 |
| |

図4 ワークシートの例 (体験学習2：生活体験の一部。実物はA4大)

(3)学習3 (体験学習2：日常生活体験、5単位時間) 【体験は筆者らが、発表は通常の学級の担任が各々主担当】

アイマスクを着用し目が見えない状態で様々な日常生活動作を行ってみる体験である。6グループ (各グループは5から6名) に分かれ、各グループが以下の日常生活動作から1つを選択して体験する。

- ①缶ジュースの中身を当てる
- ②衣服や靴の着脱をする（写真2）
- ③お金の種類を当てる
- ④手渡されたものを絵に描く
- ⑤対面した相手のコップに水を注ぎ乾杯して飲む
- ⑥給食を食べる（写真3-1, 3-2）



写真2 自分の靴を探す



写真3-1 給食

（間違って、隣の児童の牛乳に手を伸ばす）



写真3-2 給食

（隣の児童の牛乳であることに気がつかないまま口に運ぶ。ふたがついていることにも気づいていない。中央下がこの児童の牛乳）

各グループ内で、アイマスクをして選択した「日常生活動作をする者」、「介助を試みる者」と「観察する者」とに分かれ、交代しながら全員が体験する。体験した感想や観察した結果についてワークシートに記入する。体験を通して実感した不自由さとそれを解決するための方法についてグループで話し合い、まとめる。

グループごとに体験を発表し不自由さ等について話し合った結果を、クラス全体に発表し、話し合う。

(4)学習 4 (体験学習 3 : 歩行体験、3 単位時間)【筆者らが主担当】

目の見えない状態で広い空間を歩いてみる体験と介助してみる体験である。通常の教室の約 2 倍広さがある学習室を利用し、全員が、アイマスク無し・有りの順で壁伝いに歩き 1 周する。次に、幅約 1.5m 長さ約 20m のクランク状コースをアイマスクをして白杖無し・有りの順で歩く (写真 4)。

いずれも、「歩行体験者」、「介助を試みる者」と「観察する者」とに分かれ、交代しながら全員が体験する。体験した感想や観察した結果についてワークシートに記入する。ワークシートに記入した内容を発表する (この体験では、安全確保のために、教頭や担任以外の教員も参加を依頼する)。



写真 4 歩行体験

(5)学習 5 (調べ学習、2 単位時間)【通常の学級の担任が主担当】

グループに分かれ、点字や盲導犬について文献やビデオ等で調べたり、点字ブロックについて実際に町を歩いて調べる。グループごとに発表する。

(6)学習 6 (ビデオレターの作成と視聴、2 単位時間)【筆者らが主担当】

これまでの学習をふまえ、全盲の人に質問したいことを列挙し、代表の児童が質問を読み上げるビデオレターを作成する。筆者らが全盲の C さんに協力を依頼し、ビデオを視聴してもらい、質問に回答してもらう。その様子をビデオに録画する。児童はそのビデオを視聴する。

(7)まとめ (作文作成、1 時間)【通常の学級の担任が主担当】

全学習をふりかえり感想や疑問点を作文にする。

3. 結果と小考察 (児童の学習の様子と感想から)

(1)見えないことに起因する不自由さへの気づき

初めての視覚障害体験である学習 2 に関する児童の感想を引用する。

「アイマスクを付けた時私は、まっくらなところにいるみたいで、とてもこわかった。アイマスクを付けて折り紙を折った時、線もあってなかったし、時間もかかった。目の見えない人は、折り目やかどがわかるのかなと思った。」

このように、アイマスクを初めて着用した感想として「こわかった」「緊張した」等の記述が見られた。また、上記のように折り目や角のほか、「中心がわからない」という記述や、「折り紙がどこにあるかがわからなかった」などの記述があった。

児童たちは、普段意識せずに使っている視覚の役割に気づき、視覚が使えないことに起因する不自由さに気がつき始めた。

次に、学習3で日常生活動作をアイマスクを着用して体験した感想を以下に示す。

「目のみえない人はジュースをコップに入れるときや、花に水をあげたりするときとってもふべんで、すごくかわいそうだなあ、と思いました。」

「しかくしょうがい者は、買いたいかんジュースの特ちょうを知っていないといけないので、たいへんだと思いました。」

このように、日常生活に直接関係する体験の結果、視覚が使えないと不可能な事が多くなるといった認識を持つ児童が増えた。また、「かわいそう」「たいへん」など不自由さのみに焦点化された感想が多く見られるようになった。

(2) 視覚に代わる感覚や機器の有効性への気づき

他方、児童たちは、学習3と4で体験学習を繰り返すうちに、不自由さを感じつつも、触覚など、視覚に代わる感覚の利用や白杖などの機器を使用することで不自由さを解決できることに気がついた児童もいた。そのような児童の感想を以下に示す。

「まず、プラスチックコップに、ちょうどよく入れることでした。プラスチックコップは、冷たさが感じるので、みんなうまくできました。ところが、ガラスのコップでやったら、冷たさを感じないので私は注意深くやったら、少なすぎでした。(中略) ゆびでたしかめると、ぴったりになりました(学習3⑤)。

この児童は、指をコップの内側に入れて水量を確かめる方法を考え出した。しかし発表を準備する際、「他児の指だったらいやだな」と気づいたり、発表時「お湯だったらどうするのか?」と質問されたりして、このアイデアは適当でないことを知った。コップに注ぐには「注意深くやる」ことしかなく、とても難しいことだと考えたようだった。しかし、その後、学習6で全盲の人が、コップの重さや注がれる水の音でわかると回答したことに児童たちは驚き、同時に納得していた。

次に、歩行体験の感想を示す。

「白じょうのない時、私は、コースから出てしまって、いろんな人に、右だ左だと言われ、わからなくなりました。白じょうを使ってやったら、コースからはみ出ないで上手にできました。」(学習4)

このように、白杖なしで歩行した時の失敗経験から、白杖という機器の有効性を感じ取った児童が何人もいた。また、この児童の場合、視覚障害者を介助する場合の留意点も気づき始めている。つまり、この児童は、一度に大勢の人が声をかけることによって、視覚障害者を混乱させる可能性があることを、体験から知ったと思われる。

(3) 視覚障害のある人への支援についての気づき

学習5では児童たちはグループに分かれ、点字、盲導犬、点字ブロックについて調べ、発表しあった。点字について調べた児童の感想を引用する。

「図書館に行って、点字の本を借りてきてみんなで覚えようとしたんですが、ぜんぜん覚えられませんでした。それなのにビデオを見ると、目のみえない人はスラスラ読んでいたのでびっくりしました。」

このように、身近にありながらも、未知であった点字などについて調べ、体験した結果を率直に報告している。

表4 Cさんへの質問

質問1 ☆まず、「歩く」ということに関してです

- ・物や人にぶつからないように歩くにはどんな工夫がありますか？
- ・階段を上ったり下りたりするときにはどこに気をつけるのですか？
- ・廊下や、町で角を曲がる時にはどうするのですか？
- ・壁も点字ブロックなど、なにもない広いところではどうやってあるきますか？
- ・大通りや人ごみの中とかで、杖がはじまで届かなかったり、人が多くて使えないときは どうしますか？
- ・杖を落としたらどうしますか？
- ・家の中でも杖をもってあるきますか？
- ・横断歩道を渡るときにはどうするのですか。
- ・音楽のない横断歩道の時は「とまれ」はどうしてわかるのですか？
- ・道がわからないときはどうしますか？

質問2 ☆次に買い物のごとです

- ・買い物で、お金を払ったりおつりをしらべたりするときはどうするのですか？
- ・買い物の時に、欲しいものはどうやって見分けるのですか？
- ・パックに入っているものはどうしますか？
- ・色鉛筆はどうやってみわけるのですか？
- ・駅で切符を買うときはどうしますか？

質問3 ☆次に食事や生活についてです

- ・料理を作るときに困ることはどんなことですか？
- ・食事をするときどんな工夫がありますか？
- ・箸はどうやってつかいますか？
- ・飲むときに困ることや工夫はありますか？
- ・着替えるときに、たんすの中から今日の洋服はどうやってきめるのですか？
- ・布団は一人でしくのですか？
- ・洗濯物を干すときの工夫はありますか？
- ・新聞はどうやってよみますか？
- ・テレビはよくみますか。ラジオのほうがいいですか？
- ・字を書くときにはどうしますか？ ひらがなや漢字もかけますか？
- ・絵を描く時の工夫はどうしていますか？

質問4 ☆その他についてです

- ・杖はどこでかうのですか？
- ・杖を使っていて不便なことはどんなことですか？
- ・点字を覚えるのは大変でしたか？
- ・時刻はどうやってしてるのですか？
- ・ボール遊びをするときの工夫はどんなことですか？
- ・折り紙をおったことがありますか？
- ・トランプはどうするのですか？
- ・「宅急便でーす」といわれたけれど、ほかの人だったらどうするのですか？
- ・危険はどのようにかんじとっていますか？
- ・見えない生活に慣れてくると、不安な気持ちはなくなりますか？
- ・何が一番不自由ですか？

児童たちは、学習2から4によって視覚障害を疑似体験したからこそ、この調べ学習に意欲的に取り組んだと思われる。また、同時に、点字、盲導犬、点字ブロックの役割や大切さに気づくことができたと考えられる。

(4) 全盲の人とのビデオレターでの気づき

全4学級の児童が挙げた質問項目を整理しビデオレターの原稿にしたものが表4である。Cさんの回答ビデオには、児童たちの質問への回答に加え、仕事風景や点字新聞を読む様子、折り紙を折る様子が収録されていた。児童たちは質問に対する全盲のCさんの回答ビデオを見て、次のような感想を書いた。

「ビデオを見てびっくりしました。目が見えないのに折りがみではこをすらすらとつくっていました。」

「Cさんは仕事するとき、白杖をもたなくても歩けるのがすごいです。」

「点字新聞というのがあってみんなに読んでくれました。しかもわたしたちと同じくらいの速さで読んでくれました。」

このような感想や回答ビデオ視聴時の児童たちの様子から判断すると、折り紙を折ることができる、白杖無しでも歩くことができる、点字は墨字と同じかそれ以上の速さで読むことができる、という3点に児童たちは最も関心を抱き、率直に「すごい」と表現していた。見えなくてもできることがたくさんあることに気がついたと思われる。

(5) 全体を通しての感想

B学級31名中欠席者を除く29名がまとめの作文を作成した。すべての作文から、児童一人ひとりがその子なりに、本授業のねらいである「視覚障害の知識や体験を通して、障害による不自由さと不自由さに対する生活上の工夫について知る」を達成したことがわかった。

さらに、6年間を通してのねらいを踏まえて、視覚障害のある人に対する気持ちの表現があるか、自分はどうしたいかについての表現があるか、の2点について検討した。

気持ちの表現があったものは18名であった。このうちCさんについて、見えないにもかかわらず、いろいろなことができることを「すごいなあ」と記述している者が16名、視覚障害のある人は「かわいそう」と記述した者が1名、自分たちは体験学習を楽しんだが「しかくしょうがいしゃはどう思っているのだろう」と記述した者が1名であった。

「目が見えないのに、〇〇ができるなんてすごい」という感想は、体験学習によって児童たちが目が見えないと不自由なことが増えることを実感していたからこそ出てきたものであろう。視覚障害のある人が独力でできる事は健常者のそれとそれほどかわらない。しかし、児童たちは、体験学習によって、様々なことができるようになるまでの視覚障害のある人の努力に、思い至ることができたのではないかと思われる。

さらに、障害のある人と出会ったとき自分はどうしたいかを表現したものが4名いた。そのうちの1名の作文の最後の部分を紹介する。

「Cさんは、私が折れない折り紙を、上手に折りました。わたしは、すごいなあ、と思いました。目が見えなくてもたっきゅうをしているのだそうです。私は、目が見えなくても、できる事は、できるんだ、とすごく思いました。」

目が見えなくてもできること、不便なことがあるんだな、と思いました。

もし勇気があれば目の見えない人を助けてあげたいな、そう思いました。」

この児童は「助けてあげたい」という表現を使ってはいるが、「できる事は、できる」ということに気づいており、視覚障害のある人について適切な認識を持ち始めたと考えられる。このように、少数ではあるが、本授業6年間全体のねらいに接近できた児童もいた。

付記：本授業研究は、豊田弘巳、三浦八重美、石岡幸子、仏淵千枝子、杉井克子、荏原さち子の各教諭との共同研究によるものである。